

令和7年度 研究の概要

B6②グループ

①田代小 中根尚之 大和小 田中優輔 新栄小 朝賀ゆう乃
鳴海小 福田菜々穂 たかしま小 尾崎巧幸

自ら課題解決に向かうことのできる児童の育成

1 研究のねらい

小学校学習指導要領解説算数編(2017)では、算数科の目標の一つとして、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度の育成が挙げられており、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けさせるだけでなく、身に付けた知識及び技能を活用していくことは極めて重要である」と示されている。全国学力状況調査(2024)の結果を見ると、「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」という質問に対して、否定的に回答した児童の問題の正答率は、肯定的に回答した児童と比べて約 20%低かった。このことから、知識及び技能は身に付けるだけでなく、他の場面においても活用できないかを意識することが必要であると分かる。

算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養うためには、まず身に付けた知識及び技能を自分の身近な課題の中で活用できるようになることが大切であると考え、本研究では、自ら課題解決に向かうことのできる児童の育成を目指していくことにした。本グループの考える自ら課題解決に向かうことのできる児童とは、これまでに学んだ知識及び技能や数学的な見方・考え方を整理し、それらの内容を他の問題にも自ら活用しようとするところができる児童のことである。このような児童の姿に迫るためには、なごや学びのコンパス(2023)で述べられている「学ぶペースや方法、内容などを自己選択、自己決定しながら学ぶ」ことが必要であると考え、自由進度学習を取り入れた実践を行っていくことにする。

2 児童の実態

5月に本グループの担任する学級で行った実態調査では、「算数の授業で学習して大切に思った解決方法や考え方を、ノートなどに書いて整理することがありますか」という質問に否定的に回答した児童は全体の 27%だった。また、「算数の授業が終わったときに、今日の解決方法や考え方をさらに他の場面でも使ってみたいと思うことはありますか」という質問に否定的に回答した児童は全体の 34%だった。このことから、どの学級においても学んだことを整理したり、他の場面に生かそうとしたりする意識の低い児童が複数名いることが明らかとなった。

以上のことから、次の二つの手立てを講じることで、目標とする児童の姿に迫っていく。

3 研究の内容と手立て

手立て① 学んだことを整理する場の工夫

単元や授業の冒頭での一斉指導の後、これまでの学習で大切だと思った知識及び技能や数学的な見方・考え方を短い言葉で書き出し、全体で共有する活動を行わせることで、他の場面においても活用できそうな内容を整理することができるようにする。

手立て② 整理した内容を自分の見つけた課題に活用する場の工夫

様々な種類・難易度の問題の中から、自分が整理した内容を基にして解決できそうな問題を見付け、自分の課題として取り組む活動を行わせることで、自分の整理した内容が他の場面においても活用できることを実感できるようにする。その際、自分の見つけた課題には個別で、または必要に応じて友達と協力しながら取り組ませることで、児童一人一人が課題を解決できる場面を増やし、多くの達成感を得られるようにする。